

左近稲荷の初午

松本美虹¹

はじめに

茅ヶ崎駅の北側に「左近稲荷」という稲荷神社が鎮座している。駅から比較的近く、付近にはビルが並んでいる。

左近稲荷では例年、初午^{はつうま}という行事が行われている。本稿では左近稲荷の氏子が行っている初午について紹介し、将来的には茅ヶ崎市内で行われている初午の比較研究に活用できればと考えている。

調査をさせていただいた日は平成 29 年（2017）2 月 14 日（火）。暦では、この年の初午は 2 月 12 日（日）。しかし、稲荷講中には日曜日に仕事をされている方もいるため、この年の左近稲荷の初午は 2 月 14 日に行われた。浜降祭のように開催日を曜日に合わせて実施している例は他にも見られる²。

1 稲荷神社とは

『山城国風土記』には、和胴 4 年（711）2 月 7 日の初午に稲荷神が稲荷山三ヶ峰に鎮座したと記されている。この故事に因み、稲荷神に五穀豊穡、招福、商売繁盛などを祈願するようになった。

もともと稲荷神は稲を象徴する穀霊神・農耕神として「稲成り」の意味があったが、その後、稲を荷^{いなり}なう神像の姿から「稲荷」と書かれるようになった。商工業の発達により穀霊神から生業守護神などに変化し、都市では商売繁盛などの神として各路地で祀られる場合もある。

2 初午とは

なぜ、稲荷神社で「初午」という行事が行われるのか。通常、私たちが使用している日にちは、十干³十二支⁴で組み合わせた六十干支で示すことができる。これに合わせ、立春（2 月 4 日）後の初めての午の日を「初午」と呼んでいるのである。

稲荷神が稲荷山三ヶ峰に鎮座した日が初午の日

であったため、稲荷神社では、この日に祭礼を行うようになった。

場所によっては、午の日に近い土曜日、日曜日に行われる場合もある。左近稲荷の場合、曜日は異なるが、講中に都合が良い日に設定するという意味では同じだと考えられる。

3 左近稲荷とは

祭神は左近稲荷大明神である。

創立年代は定かではないが、かつて左近稲荷は元町の水沢製材所にあったという話もある。昭和 38 年（1963）発行の明細地図には銀座通り（現・エメロード）付近に神社の地図記号である鳥居のマークが記載されている。明治 31 年（1898）の茅ヶ崎駅開業後、駅周辺は急速に変化した。左近稲荷も移動を余儀なくされたと考えられる。

現在、左近稲荷が鎮座している新栄町^{しんえいちやう}を含め、共恵、元町、幸町^{さいわいちやう}の一带は、住居表示施行前までは新町一丁目から六丁目という住所であった。本村に対して、茅ヶ崎駅開業後に整備された街並を「新町」と呼んでいたのである。

現在地に移動後、左近稲荷前の道は「稲荷通り」と呼ばれていたが、現在ではトンネル通り、電気通りと呼ぶ方もいるようだ。

稲荷講は左近稲荷付近で店を経営されている方が中心となり、構成されている。初午の日は、その年のオヤド（お宿）の家に講中が集まり、飲食の他、神官を呼んで祈祷をしていただく。オヤドは各家が輪番に担当する。現在、講中は 10 組のため、10 年に一度はオヤドがまわってくる。初午は、オヤドの都合が良い日に行われる。

講の行事としては、初午の他に京都・伏見稲荷神社への参拝がある。毎年 5 月頃、京都観光も兼ねて講中でお参りに行く。以前は一泊していたが、現在は日帰りとのこと。



【写真1 左近稲荷】

4 左近稲荷の初午当日の流れ

(1) 清掃、櫛の取り付け

朝8時頃に集合し、敷地内を清掃。櫛を取り付けた長い白色の櫛^{のぼり}2本を鳥居の左右に設置。また、鳥居には竹を取り付ける。



【写真2 清掃風景】



【写真3 櫛に櫛を取り付ける】



【写真4 鳥居に竹を取り付ける】

(2) 御神饌^{ごしんせん}をつくる

9時半頃よりオヤドの家にて、御神饌をつくる。

オヤドの家に移動する際は、左近稲荷の社殿に置かれていた狐の木彫りなどを持って行く。

家の鴨居に赤色と青色の幕を各2点、しめ縄、掛軸を吊るす。掛軸には「正一位 左近稲荷大明神」の墨書の他、2匹の狐が描かれている。

手前の台中央には小型の社、鳥居、櫛、ロウソク立てを配置。左右には左近稲荷より持って来た木彫りの狐、花瓶に入った櫛、鉚子、小型の灯籠がある。その他には三方、水、果物、菓子、赤飯など。10時前には完成。



【写真5 幕を掛ける】



【写真6 狐の木彫り】



【写真7 御神饌】

(3) お供え物・食事の用意

御神饌をつくる一方、オヤドの台所では別の講中がお供え物、食事を用意している。お供え物、食事は餅、赤飯、金目鯛、白和え、ぬた和え、煮物、けんちん汁など。

調理道具は、オヤド以外の講中の家からも持参して使用している。大量に用意するため、大鍋などの道具が必要。



【写真8 煮物、白和え】



【写真9 赤飯、ぬた和え、煮物、けんちん汁】

(4) 祈祷

第六天神社の神官を呼び、祈祷していただく。お供え物、食事の用意は、神官が来るまでに終了している。

御神饌前に神官が座る席を用意し、講中はその後ろに数列に座る。祈祷前、神官は講中と向かい合って着席し、初午に関する話をする。その後、祈祷を開始。祈祷後、茅ヶ崎に関する昔の話をされる。

(5) 精進落とし

祈祷後、神官と講中が共に食事。午後2時に終了し、一度解散。

(6) お疲れ様会

供えていた金目鯛は、夜6時頃より行われる「お疲れ様会」で煮て食べるため、料理屋に運ばれる。

例年、金目鯛はオヤドがいただくが、この年は他の講中にも振る舞われた。

おわりに

市内各地で行われる初午のうち、茅ヶ崎駅近くにある左近稲荷を取り上げた。

付近は市街地で店舗が並んでおり、講中には商売をされている方が多い。商売繁盛の神である稲荷神が祀られる条件は整っていたと言える。

商売を営む人々が講を構成し、お互いに協力し合い、講の行事を行っている。かつては同様の講が日本各地で行われていたが、高齢化、集会場の老朽化などの理由で解散する例もある。

本来、何のために講が構成されるようになったのかを考える時期ではないだろうか。

稲荷講中の方々は左近稲荷に愛着を持ち、今後自分たちを守る神として祀っていきたいと考えている。また、左近稲荷の存在を地域の人々に知らせたいと思い、試行錯誤されているようだ。

今回の報告が今後、市内各地の初午、稲荷講を調べる際の手掛かりとして地域性を明らかにする資料になれば幸いである。

謝辞

最後となりましたが、初午に同行させていただいた左近稲荷講中の皆様には、大変お世話になりました。この場をお借りして、お礼を申し上げます。

参考文献

- ・1963『茅ヶ崎市明細地図』明細地図編集社
- ・柴田源三郎 1995「稲荷神社の初午祭」『若越郷土研究』40 福井県郷土誌懇談会
- ・茅ヶ崎市 1982『茅ヶ崎市史 5 概説編』
- ・茅ヶ崎市 1987『写真集茅ヶ崎きのうきょう』
- ・原島知子 2011「鳥取の初午行事－鳥取市上味野地区を中心に」『民俗文化』23 近畿大学民俗学研究所
- ・福田アジオ他 1999『日本民俗大辞典 上』吉川弘文館
- ・福田アジオ他 2000『日本民俗大辞典 下』吉川弘文館

¹ 茅ヶ崎市文化資料館 学芸員

² 現在、海の日に実施されている浜降祭は以前、7月15日に実施されていた。

³ 甲（こう・きのえ）、乙（おつ・きのと）、丙（へい・ひのえ）、丁（てい・ひのと）、戊（ぼ・つちのえ）、己（き・つちのと）、庚（こう・かの

え）、辛（しん・かのと）、壬（じん・みずのえ）、癸（き・みずのと）

⁴ 子（ね）、丑（うし）、寅（とら）、卯（う）、辰（たつ）、巳（み）、午（うま）、未（ひつじ）、申（さる）、酉（とり）、戌（いぬ）、亥（い